

目 次

巻頭言	1
-----	---

論 文

1. 国際共同利用・共同研究拠点制度導入からの示唆	3
桑島 修一郎, 上田 義勝	

総 説

2. 森林圏－大気圏のガス交換フラックス計測のための分光技術	10
高橋 けんし	
3. リグニンの創薬資源化	21
岡部 由美	
4. タンザニアのミオンボ林における住民参加型森林管理の展開と課題	27
仲井 一志	
5. 人工知能時代の電離圏研究	34
劉 鵬, 横山 竜宏	
6. 侵略的外来植物由来の二次代謝産物が駆動する植物-根圏微生物間相互作用	40
中村 直人	

解 説

7. ファインバブルを巡る国際標準化	45
上田 義勝, 仲上 祐斗, 桑島 修一郎	

巻頭言

NHK で放送中の『舟を編む〜私、辞書つくります〜』（原作：三浦しをん「舟を編む」）を毎週楽しみにしている。辞書編纂という稀有な題材、池田エライザと野田洋次郎というキャスティングの妙、そして、脇を固める俳優陣の上質さに加えて、ドイツの国際映画祭で高く評価されたというニュースも入ってきたから、これは絶対に見ようと思って見始めた。物語は、出版社でファッション誌の編集に携わっていた主人公・岸辺みどり（池田）が、突然、辞書編集部へ飛ばされることから始まる。馬締光也（野田）という、温厚で生真面目だが、辞書を作ることに人生のすべてを捧げているような風変わりな上司を目の前にし、最初は戸惑う岸辺だが、馬締を中心とする辞書編集部の熱意に次第に感化され、自身もまたこだわりの辞書「大渡海」の製作に深くのめりこんでいき……。

物語の途中、「大渡海」のデジタル版のみを発売し、紙媒体は作らない、と社長が言い出したせいで、製本する紙の質感にすら強く固執するくらい紙媒体での製作しか頭になかった辞書編集部は、蜂の巣をつついたような大騒ぎになる。どうやって紙媒体の意義を社長に理解してもらうか？ 編集部が一同に会して作戦会議が始まる。そんな場面で、セレンディピティーという語彙が出てくる。「調べたい言葉があつて辞書を開くと、どうしても他の言葉が目に入って、自然と出合いの機会になる。辞書とは、分からない言葉を調べるだけではないんだ。デジタルの辞書検索では、セレンディピティーが求められてない。」これは、定年後の再雇用ながら、並々ならぬ熱意を持って辞書編集部を引っ張っている荒木公平のセリフである。

このセリフで即座に思い出したことがある。それは、私が図書室で学術論文の photocopy を取っていた時代のことである。DOI で検索すれば、ほんの数秒程度で文献が見つかる現代とはわけが違ふ。独特のインクやカビのにおいが混じった薄暗い書庫へと足を運び、整然と並べられたバックナンバーの中からお目当ての論文を見つけ出す。すると、どうだろう。その隣のページに載っている論文から後光のようなものが見えるではないか！（いや、ホントですよ、これ）。この体験を表す語彙は、まさしく、セレンディピティーだったわけだ。今にして思えば、目的の学術論文を見つけてきてわくわくしながら読むのはもちろんだが、想定外の出会いに期待が膨らむということも、わざわざ書庫へ足を運ぶ原動力になっていたような気がする。

実は、これと似たようなニュアンスのことを、二年前に発行した本誌第 19 号の巻頭言で、当時の編集委員長の飛松さんが言及されている。飛松さんの巻頭言を拝見したとき、わかるわかるー！と甚く納得したことを覚えている。飛松さんは、本稿のような駄文ではなく、デジタル媒体と冊子体の有り様について考察を深めておられる。デジタル媒体の良し悪し、冊子体の良し悪し、について私自身はうまく整理がついていない。しかし、薄暗い書庫へ足を運ぶ、たったそれだけの労力で、そこには、パソコンやスマホで目的の情報に直行するだけでは出会えないような宝物が眠っているかもしれないということを、学生には伝えるようにしている。コスパ、タイパではたどり着くことのできない広い世界があることを説くように努めている。

さて、今回の本誌「生存圏研究」第 21 号もまた、デジタル媒体のみでの発行となっている。ただし、その学術的価値そのものは、デジタルでも冊子体でも変わらないという点は明言しておきたい。

「生存圏研究」誌は、生存圏研究所で行われている研究活動の成果や情報を収録し、公表することを目的としている。公表の意義には、成果や情報の学術分野での活用のみならず、社会還元への期待も含まれている。さらに、“書き物”として遺すことは、将来、予想もしなかったところで、何か、あるいは、誰かの役に立つ、というところにつながるかもしれない。事実、我々の研究活動では、先人が残してくれた記録や情報を大いに活用している。そう、薄暗い書庫へ足を運ぶのか、電子検索で PDF をダウンロードするか、アクセスのスタイルは違えども、文献や情報に学ぶことの重要性に変わりはない。「生存圏研究」誌もまた、先人たちが残してくれた貴重な記録の積み重ねであり、この第 21 号の発行にあたり、編集幹事としてあらためて責任と喜びを感じる次第である。

令和 7 年 10 月 31 日

生存圏研究所 広報委員会

委員長 高橋 けんし